

25. 東の間の世紀「**鑽石ラヂオ**」の時代

二十世紀の始めのこと、恰も眞^ま真空管の黎明期の間を繋ぎ止めるかのような短い間、大正から昭和の初期に掛けて一世を風靡した「**鑽石ラヂオ**」の時代がありました。

「たかが**鑽石**・されど**鑽石**」の感のある資料が数多く残っています。これらを見ますと、諸先輩がこの短期間のよくぞ此処まで密度の高い研究を果たされたものかと、その強い探究心には心打たれるものがあります。

鑽石そのもの、研究としましては方鉛**鑛**、磁鐵**鑛**、黄銅**鑛**、磁鐵**鑛**などを針で突いて実験的に最良点を求めるもの、及びこれら**鑽石**の組み合わせなど、試行錯誤を繰り返した結果、何と百数十種類の組み合わせの感度の良い順序が明らかにされています。

そのうち、狐崎製作所から“**FOXTON**”という商標で一般の商品化されたことに依って安定したものが得られるようになりました。

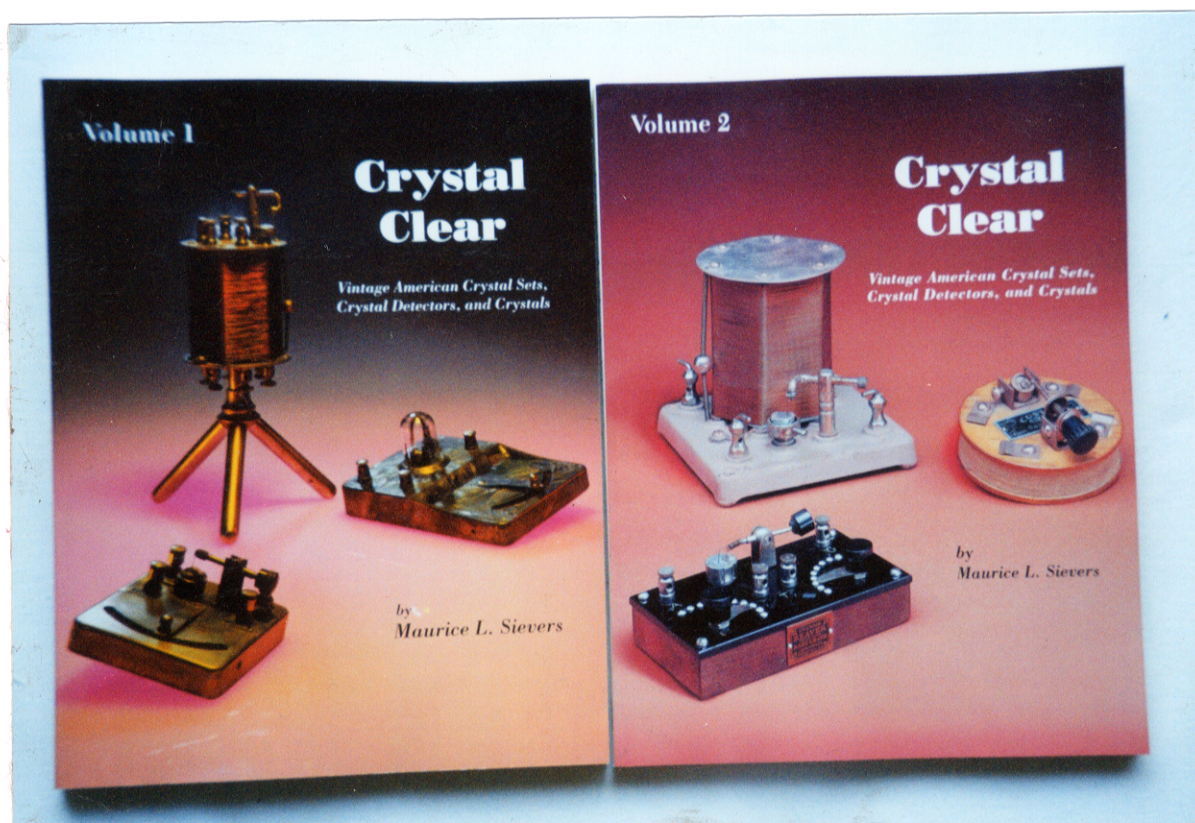


鑽石受信機の資料の一部（その1）

また、スパイダーコイル、ソレノイドコイル それに籠型コイルなど、多くの形態にコイルが見られます。特に籠型コイルは「ロー・ロスコイル」の名が示すように如何にしてロスを減らすかという努力で、今でいう如何にQを上げるかという内容です。

また、表皮抵抗の低さを利用してエナメル外皮細線を数本乃至十数本束ねた所謂「リッツ線」が多く用いられるようになりました。

同調の取り方も、コイルのタップを切り替えるもの、コイルの巻き線をスライドするもの、バリコンもクロスレー社などから出されたブックシェルフ型あり、一対のローター・ステーターを持つ回転式のもの、それも容量直線、波長直線、周波数直線など、全く知恵の宝庫です。



鑛石受信機の資料の一部 (その2)

以上、鑛石ラヂオに心血を注がれた諸先輩の足跡について、その一端をご紹介します。